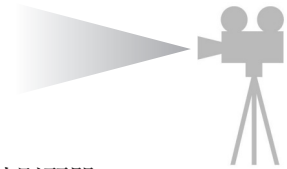




映画とその時代 ③



三井住友信託銀行株式会社 特別顧問

映画倫理委員会 委員 **桜井 修**

一般の平均的アメリカ人は、ほとんど外国映画に無関心だという。世界中から映画の才能が集まってくるハリウッドは、巨額を投じた多彩な作品群を輩出する。おそらくそれだけで十分に満腹しているからだろう。さらに、英語とドルですべて事足りる生活感覚からは、見知らぬ外国文化への興味は湧きにくい。頑なに字幕を忌避するもの、吹き替えの不自然さに驚くほど無神経なもの、そして映画界最大の祭典であるアカデミー賞に（外国映画部門）が存在しないのも、すべてそんな土壌や背景の反映だろう。

ところが今年のアカデミー賞は何とも思いがけない結末になった。作品賞を始め5部門を制した『アーティスト』は正真正銘のフランス映画。しかも近頃の3DやCGの世界とは全くかけ離れて、何とモノクロのサイレント作品だ。84回になるこの賞で初めて外国映画が選出されたこのハプニングは、これからのハリウッドを大きく変えるかもしれない。

紛らわしいネーミングだが、数年前に日本映画『おくりびと』が受賞したのは（外国語映画賞）だ。作品賞や監督賞などの他部門とは全くの別枠で、国籍とはかかわりなく、単にセリフが（英語）以外の作品はすべてこのカテゴリーに入れられる。いかにも英語を万能とするハリウッドら

しいルールだが、もちろん映画大国フランスの作品でもその例外ではなく、広く関心を集めることのないこのマイナーな部門に押しこめられていた。

ところが『アーティスト』は、思いがけないスタイルでこのルールに挑戦する。ストーリーの舞台は、まさに本家本元のハリウッド。時代設定は1920年代の映画黄金期。そして当時のスクリーンそのままに白黒でかつ無声。

同じ舞台と時代背景のラヴストーリーは、そもそもハリウッドの十八番だった。『スタア誕生』や『雨に唄えば』などは今でも語り継がれている。まさに（古き良きアメリカ）そのままの世界だ。

おそらくそれだけでも、中高年世代が大半を占めるアカデミー会員たちは、手放しでノスタルジーにシビれたのだろう。しかも同時のセリフは流れないから、（外国語部門）の対象にはならない。何とも巧みなシナリオで『アーティスト』はメインストリームのオスカーを手中にした。

映画というメディアは、その国その時代の世相をもろに映し出す鏡だ。今のアメリカは、いわゆる99パーセントの鬱屈で、ひたすら（古き良きアメリカ）へのノスタルジーに癒やしを求めているのだろう。—————